

課題名	51 難防除病害虫の防除法の確立	分類	①
	イチゴのナミハダニに対するニッソラン水和剤の使用時期		
試験研究年次	1年(完了)		
<p>I 目的 本ほ定植後のイチゴに発生するハダニに対し、ニッソラン水和剤はハダニ密度が1葉当たり0.5頭以下の場合には防除効果が高いが、1葉当たり5頭以上の場合には防除効果が認められない事を62年の成果として報告した。しかし、ハダニ密度は農家段階では把握が困難であることが多い。そこで、一般にハダニ密度が低い時期であるイチゴの育苗期において、本剤の防除効果を明らかにする。また、育苗期の灌水が防除効果に及ぼす影響を明らかにする。</p>			
<p>II 試験方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 試験場所 : 筑紫野市 福岡農総試験場内 2 耕種概要 : 品種 とよのか、定植 平成 1年10月 9日、無加温ビニルハウス 3 供試薬剤 : ニッソラン水和剤2000倍、一部展着剤特リノー5000倍を加用した。 4 区制・面積 : 1区 5㎡、2区制 5 散布時期・量・方法 : 育苗期は平成 1年10月 4日、定植後は10月18日に肩掛噴霧機で十分量散布した。育苗期は薬剤散布の約 2時間後、薬剤が完全に乾燥した時点で園芸用如露で株上から 1区 5ℓ 灌水した。なお、灌水により育苗鉢内に一時的に灌水した。また、葉の表面は水で濡れたが、裏面はほとんど濡れなかった。薬剤散布後定植まで露地で管理し、毎日株上から灌水した。 6 調査方法 : 1区10株を無作為に抽出して調査株とし、各調査株から任意に 3小葉を抽出しナミハダニ雌成虫数を数えた。 調査は平成 1年10月 4日から平成 2年 1月20日まで、6~12日毎に行った(具体的データ参照)。 			
<p>III 主要成果の概要</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ニッソラン水和剤の定植 5日前育苗期散布は、本ほ定植 9日後散布と比してナミハダニの防除効果に差は認められず、いずれの時期も使用可能である。 2 ニッソラン水和剤の育苗期散布は、薬剤が葉裏にかかるようていねいに行う。散布薬剤には展着剤を加用することが望ましい。 			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 イチゴのナミハダニに対するニッソラン水和剤の散布時期別防除効果

試験区	薬剤散布時期 (月/日)	供試薬剤	希釈 倍数	1葉当たりナミハダニ雌成虫数(頭)					
				10/4	10/12	10/18	10/25	10/31	11/7
1	育苗期(10/4)	ニッソラン水和剤	2000倍	0.04	0	0	0	0	0
2	育苗期(10/4)	ニッソラン水和剤 展着剤	2000倍 5000倍	0.04	0.05	0.15	0.05	0	0.20
3	本ほ(10/18)	ニッソラン水和剤	2000倍	0.03	0	0	0.05	0	0.05
4	—	無処理	—	0.02	0.05	0	0	0.15	0.10

注) 定植: 10月9日

11/17	11/28	12/8	12/18	12/28	1/8	1/20	葉害
0	0.25	0.45	0.90	1.40	6.05	14.75	無
0.15	0.85	0.05	1.35	1.40	2.75	5.30	無
0.05	0.10	0	1.05	2.15	3.65	8.65	無
1.65	7.05	5.70	19.70	43.25	48.55	84.60	

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 県野菜病害虫防除基準の指導資料に、ニッソラン水和剤の使用法を追記し、防除指導を図る。
- 2 本剤はハダニ密度が1葉当たり0.5頭程度の時期に散布しなければ防除効果は期待できないので、ハダニ密度が高い場合は県防除基準により他の薬剤を使用する。
- 3 育苗期散布は葉裏に薬剤が付着するように、ていねいに行う。
- 4 育苗期の灌水は、散布したニッソラン水和剤が乾燥した後に、葉裏に水がかからないように行う。
- 5 ニッソラン水和剤の安全使用基準は、収穫前日まで、2回以内の使用である。

VI 今後の研究上の問題点

- 1 ナミハダニのニッソラン水和剤に対する感受性検定

VII 資料名

62年度福岡県農業総合試験場経営環境研究所野菜・花き病害虫関係試験成績概要書
平成元年度福岡県農業総合試験場生産環境研究所野菜・花き病害虫関係試験成績概要書